

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「知事と語ろう。10年、20年後の長野県〈次期総合5か年計画策定に向けて〉」

日時 平成29年11月5日（日） 15:00～18:00

場所 伊那公民館（伊那市）

目次

1 進行役あいさつ	・・・	P 2
2 知事あいさつ	・・・	P 2
3 グループ発表	・・・	P 3
4 知事とのディスカッション	・・・	P 9
5 知事総括コメント	・・・	P 38

【参加者 33人】

公募による一般県民

長野県知事 阿部守一

進行役 佐藤 駿 氏（THE APP BASE株式会社 代表取締役）

15時から16時まではグループごとに以下の次期総合5か年計画の政策推進の基本方針から一つ選んで意見交換を行っていただき、16時から知事とのディスカッションを行いました。

- 学びの県づくり
- 産業の生産性が高い県づくり
- 人を引きつける快適な県づくり
- いのちを守り育む県づくり
- 誰にでも居場所と出番がある県づくり
- 自治の力みなぎる県づくり

※各グループの意見交換の内容は省略しています。

1 進行役あいさつ

【進行役 佐藤 駿氏】

皆さん、おそろいになりましたでしょうか。では、知事がいらっしゃいましたので再開したいと思います。

知事がいらっしゃる前にグループで、いろいろなディスカッションをさせていただきました。知事からごあいさつをいただいた後に、各グループでどんな意見が出たか、発表してもらいます。知事のコメントを受けながら、最後、みんなでディスカッションができればなと思います。

それでは早速ですが、知事から今回の県政タウンミーティングにかける思いをお聞かせください、よろしくお願いいたします。

2 知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

皆さん、こんにちは。長野県知事の阿部守一と申します。よろしくお願いいたします。

今日は県政タウンミーティング、大勢の皆さんにお参加いただきましてありがとうございます。今日はシニア大学の皆さんと、あと高校生の皆さんが大層を占めているという、ちょっとこれまでやってきたタウンミーティングの中でも大分、雰囲気の違いがあるというふうにして、先ほどからちょっと拝見していました。

今、長野県は新しい総合5か年計画を策定しているところです。私、多くの皆さんの夢と希望を実現できる計画にしていきたいというふうにして、いろいろな方と意見交換をしてきています。ぜひ、今日も皆さんのところに次期総合5か年計画の資料をお配りしていますよね。今、そういう方向で大きな方向性の議論が進んでいますけれども、問題はディテールというか、もう少し具体的に何をしていくのか、具体的に何が必要なのかという部分が、大きな柱立て以上に重要だというふうにして思っています。

ぜひ、今日は、皆さんからできるだけ具体的なご提案、例えば何というか、暮らしやすい県にしましょうみたいな抽象的な話だとなかなか話が進んでいかないので、できれば私が腰を抜かすぐらいの提案をしていただいて、そういう夢みたいなものであっても、夢見ないことには決して現実には私はならないと思っていますので、特に今日は高校生がいっぱいいるので、ぜひ、みんなの夢を出し合ってもらって、その実現に向けて何をすればいいかということをお話し合う機会になればありがたいと思いますし、またそうした皆さんのご提案の中から、一つでも二つでも、新しい総合計画の中に埋め込んでいく、具体的なアイデアを得られればありがたいというふうにして思っています。

今日は佐藤駿さんにファシリテーターをしてもらいますが、何回かお会いしていますけれども、ビジネスも順調なんですか。

【進行役 佐藤 駿 氏】

順調でございます。

【長野県知事 阿部守一】

何か、最初会ったときとは人間が変わったように、何かいい顔をしているなと思ってさっき話していたんですけれども。ぜひ、これからやっぱり時代がどんどん変わっていきます。時代がどんどん変わっていきますので、私ももう50歳を過ぎましたけれども、我々大人の世代、あるいはシニア世代も、それから若い世代もどんどん未来に向けて、前を向いて一緒になって進んでいきたいというふうに思いますので、どうかよろしくお願いします。今日は佐藤さん、ファシリテーター、よろしくお願いします。ありがとうございます。

【進行役 佐藤 駿 氏】

ありがとうございました。では早速ですが発表のほうに移りたいと思います。ここのグループから、ではお願いします。皆さんちょっと前に出ていただいて、一人、発表していただくような形ですね。大体、2～3分でお願いします。

知事、今日は、伊那らしいチーム名にしてもらっています。

3 グループ発表

【A チームカメムシ】

チームカメムシです。よろしくお願いします。

それでは、チームカメムシの「いのちを守り育む県づくり」を紹介したいというふうに思っています。

さきほど、高校生のほうから、長野県の寿命は全国で1、2位を争っているんだけど健康寿命は低いんじゃないかという話がありまして、それでどうしていけばいいのかというのが一つ、出てきました。もう一つは災害がやっぱり多いんじゃないか。それから、あと高齢者の交通事故とか、そういう交通問題みたいなものも少し出てきたので、

それをまとめる案も提案したいなというふうに思っています。

一つは、やっぱり高齢者の健康寿命が低いというのをどういうふうに考えていくかということなんですけれども、ゲートボールをされている高齢者が多かったりとか、それから、定年の後、また働いている高齢者も多い中でどうしてなのかなという話が出てきましたが、もう少し高齢者が生き生きと働いてもらったりとか、違う世代と交流していただくためにはどうしたらいいのかというのを少し考えました。

一つは高校生、それからシニア大学に通っていらっしゃる方もいましたので、そういう人たちをどうやってつなげていくか、コミュニティの場をどういうふうにつくっていくかというのを少し考えました。文化祭の中で何かものづくりの経験を持った高齢者の方に来てもらって、その展示をしてもらいながら、高校生がそれに興味を持ったらそこでつながっていくとか。

それから、今、少しあると思うんですけれども、クラブ活動に関しても、高齢者の方で技術を持った方がそういうところに参加して高校生を見ることができないかとか、それから、あと老人の通学路の見守り隊というのをもっと増やしていったらどうだということも少し考えました。

そんな中で出てきたのが、これは画期的だなというふうに思ったのが一つあるんですけれども、その世代を埋めるものをどうしていくかということだったんですが、一つは、若者と老人の婚活パーティをやったらどうだということを考えました。これはシニア大学の方の意見なんですけれども、やっぱり老人の方と若者の方とは、やっぱり世代が違うことによって考え方のその向きがちょっとずつ違っている場合があるんじゃないか。そうすると、どちらも気を使ってしまって、結局は中身が深まらない。そういうときに誰か第三者が入ってもらったり、その中間の年齢の方が入ってもらったりして、その考え方をすり合わせていくということがあるんじゃないかなというふうに考えました。

それは、やっぱり今の高校生がそのSNSなんかで簡単に情報が手に入ることと、どうしても情報が偏ってしまっていて、それで老人の方の経験豊かな発想なんかなかなか受け入れられないというところをこういう婚活パーティで埋められないかなというふうに考えました。それが私たちの画期的な意見です。よろしくをお願いします。

【進行役 佐藤 駿 氏】

ありがとうございます。高齢者と若者、老人の婚活パーティ、世代間、考え方をシェアして、リアルな経験とかを伝えていくと、インターネットだけじゃなくて、リアルな経験を伝えていくという発表ですが、知事のほう、いかがでしょうか。

【長野県知事 阿部守一】

ちょっと質問していい。高齢者と若者の婚活パーティというのは、やはり高齢者と若者が結婚するということ？

【A チームカメムシ】

婚活パーティのような集まりをつくるという。

【長野県知事 阿部守一】

婚活パーティのようなね、なるほど。

【長野県知事 阿部守一】

実は、私、結構、このタウンミーティングの、何というか、場をつくっていいなと思って感じているのは、今、お話しがあったように、その多世代の人たちが話をすると、若者だけで話していると出てこないエリアとか、シニアの人たちだけで話していると出てこないエリアが結構出て来るなというところがあるので、ぜひちょっとその今のアイデアは非常にいいご提案だと思いますので、ちょっと、どういう形で具体化するかというのは考えますけれども、もう既に実はこういう形でもやっているところもあって、その視点はしっかりいただくようにしたいと思います。後で、またちょっと全体的にお話したいと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。

【進行役 佐藤 駿 氏】

はい、ありがとうございます。では次のグループ、お願いします。

【B チームチェリーブロッサム】

高遠町と伊那市が合併したので桜が名物だと言えるということで、英語が得意な学生がいましたので、チェリーブロッサムチームにしました。よろしくお願いします。ちょっと私自身が9月に住民票をこっちに移したばかりであまり詳しくないので、皆さんのお力を大分お借りしてこのプログラムを進めました。

私たちのチームは「学びの県づくり」というのを選びました。学生の方が4名いらっしゃったので、どのテーマが話しやすいかなということで学生さんが話しやすいテーマにしました。

その中で課題として出たのが、企業とか大人と学校のつながりがもっとあったらいいなということが一つ、それから、例えば県内の高校とか大学の横串のつながりとか、県内の高校と大学の縦串のつながりというのがあったらおもしろいんじゃないかなということが一つ出ました。

あと、もう一つは幼児教育の先生が減っているとか少子化とか、あとは長野県も待機児童が少しいらっしゃるということがわかったんですけれども、そういう課題もあります。大きく3つの課題が出まして、最初の大人と学校のつながりと学校全体のつながりというのが一番議論が活発だったので、この2つの課題、解決策についてちょっとお話ししたいと思います。

まず大人と学校のつながりという意味では、高校を卒業して例えば就職しようと思ったときに、まだ、あまり自分の特技とかやりたいことがまだ見えてないんだけど、就職はしなければいけないということがあったりするので、例えば高校を卒業してから企業に入って、そこにインターンシップでちょっと支援金、稼がないといけないんですけども稼げるときがないので、インターンシップの支援金を高校卒業して働こうと思っている人にあつたらいいなとか。

あと地元企業の人、長野県は、私は駒ヶ根にいますけれども、駒ヶ根にも精密機器の会社とか、いっぱいいい会社があることを知って、地元企業と高校生、例えば大学生と企業の人と一緒に勉強したり授業を受けたり、技術を学んだりという場がもっとたくさんあつたらいいんじゃないかと。それで、そういうのを総合的にプログラムで組んでくれるような支援センターがあつたらいいんじゃないかということで、大人と学校のつながりというのができないかなというふうに解決策として考えました。

もう一つ、学校間のつながりということで、長野県にもいい大学はありますし、結構、大学の先生とか大学の生徒さんと高校がちょっと交流して、それぞれの授業を例えば受けたり教えてもらったりすることで単位までとれるとか、そういうふうにすると、大学と高校がつながっていいんじゃないかなというのがありました。

あとは、高校の数がちょっと少ないということもあつたので、高校の横のつながりもあつたらいいんじゃないかということで、例えばこんな授業を受けたいんだけど自分の高校にはないといったら、ほかの高校で受けられるとか、そういう、それで単位がとれるというのもあつたらいいんじゃないかなというのがありました。

あとはもう一つは高校に専門コースみたいなものをつくってもいいんじゃないかということで、ほかの高校と交流、大学と交流する中に、自分の高校に美術コースとか建築コースとかそういうのがあって、一般教養プラス何か専門的な勉強ができるコースがあ

ったらいんじゃないかという話が出ました。

さらに夢は広がって、海外とも何か連携できて、さらにそれで単位がとれれば英語も勉強できるし、さらに夢が広がるんじゃないかなということで、県内にとどまらず、海外にも出ていけるという、単位がとれる高校だったらいいんじゃないかという話が出ました。以上になります。ありがとうございます。

【進行役 佐藤 駿 氏】

ありがとうございます。では、次のグループは、では真ん中のグループで。

【C チーム蜂の子】

チーム蜂の子です。3番の「人を引きつける快適な県づくり」について話し合いました。まず、今、僕たち高校生とかが感じている現状と課題と、あとは国内外からということでしたので、来てもらってどういうふうに感じてもらうかというような点と、あと、公共交通機関について、大きく3つに分けて話し合いました。

まず今の若者、若者というか僕たちが感じているのは若者が楽しめる場所が少ないとか、趣味のスケートボードができる場所がないというような意見が出て、例えばこの辺だったら大芝高原などでできるのではないかという話になったんですが、そこへ行くにもやっぱり公共交通機関がない。また観光客の関係で、東京とかの若者、車を持っていない方が例えば移り住むにしても、一回、伊那なり南信に見に来てもらう必要があると思うんですけども、それに対する公共交通機関もないのではないかというような話になりました。

それに対する解決案として、一番画期的だと思うのはシェアタクシーということで、例えばボランティアであったり、周辺住民の方に例えばあなたはボランティアとしてタクシーを運営してもいいですよとかというような許可証を与えて、来た観光客や、どこかへ行きたい高校生を乗せてあげればいいんじゃないか、そうすれば、そのデータを集計した上で、ここからここまで行きたい高校生とか、ここからここまで行きたい観光客が多いという情報が得られれば、そこでバスを運行してもいいのではないかというような話にもなりました。

あとは南信から電車で長野、松本には行きにくい。つまり東京とか名古屋にも出にくいというような話にもなりました、これは僕の意見なんですけれども、飯田線に新しい車両を導入してスピードアップをしたらどうかという、これはちょっと自分の中での具体策なので、よければ後でちょっとお話ししたいなというところです。

あとは、観光に来てもらったついでと言っては何ですが、農業体験など、長野県などでしかできないことをやってもらって、こっちに来てくださいみたいなこともできるのではないかなという感じですか。以上です。

【進行役 佐藤 駿 氏】

はい、ありがとうございます。では奥のこちらのグループ、お願いします。

【D チームざざむし】

チームざざむしです。私たちは3番の「人を引きつける快適な県づくり」について、話し合いました。

人が少ない原因としては、集う場所がなかったりとか、魅力的な働き場所がなかったりとか、交通が不便だとか、地域の良さを知る教育の場が少ないということが問題に挙がりました。人が少ないのはいい工場がなかったりだとか、魅力的ないい働き場所がないとか、職種の種類が少ないとか、そういう問題があって、教育の問題からは、もっと地域PRする必要はあるんじゃないかなという課題がありました。人が少ないという点で見ると移民を受け入れるべきではないかという案にまとまりました。

私は英語部に入っていて、昨日までディベート大会で移民を受け入れるべきか、そうでないかという話題についてちょうど話し合っていて、移民を受け入れると、移民に対する支出よりも税収とか移民から得るお金のほうが大きかったりとか、人口が増えたりとか、社会保障が負担されたりとか、さまざまなメリットがあって長期的なメリットになります。

移民を受け入れることで、もっと人が来てくれるんじゃないかなという解決策にはなったんですけども、やっぱり移民に限らず、人が寄ってくるには魅力的な場所である必要があるんですけども、それだから、伊那にはたくさんいい自然があるので、そういうところを中心にPRしていけばいいんじゃないかなという案になりました。そうですね、移民をたくさん受け入れましょう。

【進行役 佐藤 駿 氏】

はい、ありがとうございます。では最後ですか。

【E チームいなご】

皆さんこんにちは。チームいなごです。蜂の子がそこでちょっととられてしまったの

で、仕方なく。

僕たちは1番の「学びの県づくり」をテーマにしました。その中で見えてきたのがこの、高校生が多かったのが高校の問題ということになっていると思うんですけども、この学校の勉強以外に、地域のことを学びたいということが多く出ました。でも、何か県でやっているイベントが、高校のほうに全く入ってきていないということがよくあると思うんです。で、その防止のために各学校にこのデジタルサイネージ（電子看板）を設置して、いつどんなイベントがあるということをいつでも確認できるようにして、各学校との交流や地域との交流ができるようにしたいというのが出ました。それと、その地域との交流のところなんですけれども、生徒が先生方に全部任せるのではなくて、生徒がこんな人から話を聞きたいなというのをリクエストして、その人からお話を聞くというふうにしたいなと思います。

それと、こっちの問題なんですけれども、こっちは高校生が本当に切実に思っていることなんですけれども、高遠はバス代が高いです。そういうのをどうにかならぬかなというのがお願いですね。大人たちへ、お願いします。

それと、もう冬じゃないですか、寒いですよ。皆様の仕事の環境などに暖房器具はおありでしょうか。高校は寒いんです。寒いのに高遠の場合はカメムシも出ます。出るときに授業が止まります。なので、教室が寒いというのを大人たちへ、どうかどうかしてください。よろしくお願いします。自分たちの発表は以上です。

【進行役 佐藤 駿 氏】

はい、ありがとうございます。何かいろいろな意見が出てきて、災害が多いとか、そういうインフラの問題とか、あと若者と老人の交流など、あと考え方のシェアとか、あと幼児教育ですね、待機児童問題。インターンシップとかがあったらいいんじゃないか。スケボーとかできない、シェアタクシーとかがあったらいいんじゃないか。あと、移民の受入、県のイベント情報とかが入ってこないから、情報を共有しましょうとか、寒いとか、さまざまな角度からの意見が出ていると思うんですが、各チームの発表を踏まえて知事の見解を教えてくださいませんか。

4 知事とのディスカッション

【長野県知事 阿部守一】

そうですね、見解というか、ちょっと皆さんのお話を伺っていて、私の感覚で感じて

いることと共通する話が多いなというふうにまず思っています。あと、それぞれのチームで話し合ったことも結構、共通性があったり関連性があったりしている部分が多いんだろうというふうに思います。

ちょっと、今日、時間がいっぱいあるので、少しチームカメムシの皆さんや、若い人でないと交流、若い世代と高齢者との交流の話があって、それで、あるいはそのチェリーブロッサムチームも、大人と学校のつながりの話があったり、あるいはチームいながら地域のことを学びたいとかですね。その辺から、まず一つ共通しているような話だと思うんですね。

これ、ちょっと対話したいので今日は学校の先生いらっしゃいますよね。学校の先生。まず、ちょっと学びの話とか学校と大人との付き合いの話で、ちょっと私が感じていることを言うので、ちょっと学校の先生方の意見を直接、私、聞かせてもらいたいと思うので、いいですか。

まず、今、学校の先生は多忙だと言われていて、みんな大変ですよと私も思っています。私は、学校のあり方というのはもっと開かれたほうがいいと思っています。さっき企業とか、大人と学校のつながりをもっとあるといいよねという話がありましたけれども、学校というのは、結構マルチでいろいろなことをやっていますよね。いわゆる学校の授業もやっているし、部活もやっているし、修学旅行も連れていかなければいけないし、あるいは、例えばいじめがあったらいじめにも対応しなければいけないし、進路指導もしなければいけないし、就職相談にも乗らなければいけないしと、私からすると学校の役割というのは、極めてマルチの役割を果たしていただいているなと思っているんですよ。

では将来どうしていったほうがいいかなというふうに私が考えると、もっと分解していったほうがいいんじゃないのというのが私の感覚です。ここはちょっと学校の先生のご意見を聞かせてもらいたいんですけども。例えば、企業のことを知りたいという話がありましたし、若者が話を聞きたいという人を呼べるようにしたらという話もありましたし、それは全く私も同感です。全く同感というか、ぜひそういうふうになりたいとは思っています。

今度、例えば新しく県立大学を来年4月、開校しますけれども、金田一学長と話していて、金田一先生は、大学の先生がもっと高校へ行って話をするようにしたほうがいいというふうにおっしゃっています。あるいは、私、高校生とか中学生と話していて、今日もそういう感覚でお話いただきましたけれども、結構、地域のことを知りたがっているのにわかっていない。わかっていないというか、例えば就職の話とかを考えても、さ

つきもどなたか言っていましたけれども、例えばこの中南信地域というのは、日本の中でも製造業の集積がすごい場所で、グローバルに活躍している企業もいっぱいあるわけです。その、何かテレビのコマーシャルに出るような名前の企業は確かに少ないかもしれないですけども、だけど、小さな企業だけでもグローバルな中で、唯一、ここしか技術力がないとか、あるいは世界のシェアを占めている企業がいっぱいあるんだけども、それがなかなか若い人たちには伝わっていないなというふうに思っています。

これ、例えばそういうことを学校の先生が勉強して、それで生徒に伝えるというのは、学校の先生の負担も重くなるし、それ大変だと思います。むしろ地域の企業の人たちが、あるいは経済界の人たちがどんどん学校に行って、みんな知っていますか、こんな企業があるんですよ、あんな会社があるんだよねということとか、あるいは、こんな企業ではこんな楽しいことをやっているよとか、こんな働きがいがあるよみたいな話を、もっともっとしていってもらう環境をつくっていかないといけないんだろうなというふうに思いますし、あと、さっき言ったように、学校はマルチないろいろな役割がいっぱいあるので、例えば部活は部活の専門家の、さっきどなたかおっしゃられたんですが、リタイアした人たちの中だって、スポーツでも文化でもいろいろな経験とか、知識を持たれた方が大勢いらっしゃるの、そういう人たちにもっとかかわってもらおうとか、そういう形で、私の感覚は先生方の仕事をもっと分解していったほうがいいんじゃないかということと、そのためにはもっと地域の人とか、いろいろな分野の人たちが学校に入っていく必要があるんじゃないかなというふうに思っています。

ちょっと学校の話はもっといっぱいあるんですが、あまり私だけ話するといけないので、ちょっと一遍、ここで切りますので、少し皆さんの、先生方とか、あるいは生徒の皆さんの意見を聞かせてもらえれば、ありがたいなと思います。

【遠高校教員A】

僕は今、ソフトテニスの顧問をしているんですけども、だんだん僕も年をとってきて若い先生にソフトテニスを譲って、今、僕は交互にやっているんですが、そのかわりに何か地域と取り組むようなことを、生徒会なんかで今やっているんです。多分、知事がおっしゃったとおり、教員という、やろうと思えばいろいろなことができ、手を広げるとものすごくやっぱり大変になってしまうなというふうに思っています。

逆に授業を教えるということだけに専念するというふうに考えていらっしゃる教員の方もいらっしゃるって、もうそれしか自分はやらないよという人もいないことはないかなというふうに思うんですけども。

だけど、子どもを思う気持ちというのは教員はいっぱいあって、子どものどこを育てたいかというのもまた教員それぞれ違うものですから、だからなかなか、今みたいな話になかなかないのは、やっぱりどうしても部活をやりたい先生もいっぱいいらっしゃるし、進路指導とかをやりたい先生もいるので、実際にそういうシステムがつくれれば、どんどん学校もそういうふう広がって行って、いろいろな人を多分、教員として入れていくというような形にするか、教員が相当、地域にも出て行けると思うんですけども、やっぱり外部の人たちがクラブの顧問をやったりすると、学校の教育とは違うようなことを導入されてしまったりする 때가あって、そうすると、こういうふうには実は顧問はしたいんだけど、外部講師がこんなふうにしたいたいというのがまたあるので、そういうもすり合わせていくのが難しいのかなというふうに思っています。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど、ありがとうございます。何かほかの先生、ありますか。

先生の働き方改革は、日本の社会のこれからにとって極めて重要なテーマじゃないかと思っているんですが。

【高校教員 B】

私は今の高校が初めて赴任した学校ということで、いろいろと手探り作業の中でやらせていただいているところです。

今、ちょうど3年生の担任をしております、進学と就職希望、さまざまな生徒がいるんですけども、学校のことでとか、あと、本当に地元企業のことですとか、やっぱり生徒もいろいろ探しながらやっているんですが、アドバイスするためにいろいろ勉強はするんですけども、先ほど知事がおっしゃったとおり、本当にいい企業さんがたくさんある中で、それをこちらが紹介しきれていないなと思ったりとか、生徒に選択をさせる時期なんですけれども、時にどこまで助けになれるアドバイスができていかなというところが、自分でもちょっと不安になってしまうときがたまにありまして、本当にいろいろな仕事がある中で、専門の方ですとか、やっぱり詳しい方の話を聞く機会がこの中でもとれれば、それは生徒にとってもすごくいいんじゃないかなというふうに、今、お話を聞いていて、私も感じているところです。

【長野県知事 阿部守一】

どうもありがとうございます。何となく雰囲気はわかりました。ただ、学校の先生も

いろいろなことをやりたい人もいるわけですよね。だけど、あれもこれもやるのもなかなか手が回らなかったり、厳しいところもあるということなので。

そこはちょっと先生がおっしゃったように、少しシステム的にどうするかというのは、考えていかないといけない状況になりつつあるんだらうと私は感じていますので、そこは教育委員会の皆さんの考え方もいただきながら、検討はしていきたいと思います。

先ほどお話あったように、もしくは私が申し上げたように、ぜひ、学校にはもっといろいろな人が入ってもらえるようにしていったほうがいいなと思いますし、それから、いろいろな先生の役割をもう少し分業化で、部活をやりたい人から無理やり離さなくても私はいいんだらうと思っています。私は何でも思うんですけども、やっぱり好きでやりがいを持ってやっている人から教わるのと、嫌々やっている人から教わるのでは、大分、私は違ってくると思いますので、そういう意味では、学校の先生方がこういうところで子どもたちのために頑張らうというところに、できるだけ集中してもらえよう環境をつくっていくことが必要かなというふうに感じています。ちょっとまた後で、生徒の意見がもしあったら聞かせてもらいたいんですけども。

チームカメムシの皆さんの、そういう意味では、クラブ活動に高齢者の参加だとか、さっきの高齢者と若者が一緒に集って集う場をつくるみたいな話は、これは私も重要だと思っています。

例えば、最近こども食堂というふうに言われていますが、あれも本当にこども食堂がいいのかなとも私は思っていて、あれも本当は他世代交流の場にしていったほうが私はいいんじゃないかというふうに思っていますし、まあ、今、国の厚生労働省も、だんだんその、お年寄りはお年寄り、子どもは子どもということではなくて、もっと地域丸ごと、という形で考えてきていますので、長野県としてもぜひ、何というか、若者とお年寄りと分断するんじゃなくて、今日みたいにぜひ一緒になって、いろいろな形で取り組んでいただくようにしていきたいと思います。

それからチェリーブLOSSAMの皆様方は今の学校の話ですよね。インターンシップをもっと支援しろという話は、これは重要だと思っていますけれども、あまり税金で応援するというよりは、これは企業の皆さんにとってメリットある話なので、その企業の皆さんにもちょっと、一緒に汗をかいてもらいながらやっていく必要があるのかなと。

先ほどの、企業と学校をつなぐプログラムみたいなものをどこかでちゃんと作るべきだというのは、それちょっと県も縦割り行政になっているので、産業労働部とかが企業関係、経済関係をやっている、教育委員会が学校関係をやっているんですけども、少しずつ、例えばデュアルシステムとか、いろいろな形で両部を連携をさせてきていま

すので、ぜひちょっとそういう企業と学校との連携、つながりがもっともっとできるようには取り組んでいきたいというふうに思います。

あと高大接続の話は、さっき金田一先生の話をしましたけれども、ぜひそういう形で、例えば長野県は高等教育支援センターをつくって、大学の支援には相当力を入れていきます。大学の支援。大学の支援に力を入れているので、大学の皆さんにはもう少し、大学の知的基盤、財産を地域に還元してもらいたいと思っていますので、そういう中で高校との連携、つながりということも進めていくようにしたいと私も思っています。

それから、高校の横のつながりは、これは高校生同士でも、今、長野県内、いろいろな活動してもらっているの、ぜひ自主的にいろいろなつながりをつくっていただきたいと思っています。お話あった単位互換みたいなやつは、これは制度をしっかりとしないとなかなかできないなと思いますし、あと、専門コースをもうちょっとしっかりつくってもらおうという話は、ここはちょっともう少し掘り下げたいと思います。この専門コースがあるといいというのは、誰がどういうコースがあるとどういうふうがいいと思っているんですか、誰の発想ですか。どうぞ。

【B チェリーブLOSSAMチーム】

うちの高校ではコースが4つに分かれていて、そのうちの一つを例にとって話すと、福祉コースというのがあります。そのコースでは卒業するまでに老人ホームと介護施設で働ける資格をとってから卒業するという感じで、卒業した後に、すぐそういう施設で働けるというのもすごくいいメリットだと思いますし、ほかのコースでも専門的に学べる上で進学とかにつなげていくときに、例えばこの辺は田舎なので、美術を専門的に習う塾とかがないんですけれども、そういうところの手助けといいますか、専門的に、ほかと比べていろいろなことが学べるというのがあって、あと、ここのチームで、浅く広く学べるけれども自分の伸ばしたいものが伸ばせないという意見が出て、そういう点で見ても、やっぱり高卒で就職するということで、自分のやりたいことをしっかりと学べるメリットがほしいなと思いました。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。いい意見ですね。そういう今みたいな意見をどう実現するかということを考えていくのが、私たち行政であったり、大人の責任なんだろうなというふうに思うんですね。

さっきちょっと学校の先生の話をしましたけれども、これ、また学校の先生の話にな

ってしまって申しわけないんですけれども。私、学校にも地域の人たちとか企業の人たちが入ってもらいたいと思っているんですけれども、私、実は逆に学校の先生ももっと地域に出てもらえないかと思っているんですよ。ちょっと学校の先生たちに負担感が増えてしまって、申しわけないところもあると思いますけれども。

例えば、今、話がありました美術の先生とか、あるいは最近、書道の先生ってそんなに多くないと言われているんですけれども、何というのか、一つの学校だけにいないで、もっと地域とか、あとほかの学校とか、もう少し、先生方も地域活動をしていってもらってもいいんじゃないかなと。今の負担感が重いときに、そんなことだけではできないんですけれども、少し地域からもっと学校に人が入って、学校の先生はその専門的な分野の知識もあり、そして教授方法もマスターしているわけですから、私は実はこの学びの県づくりと、今回、皆さんにお配りした資料の一番最初に「学びの県づくり」と書かせていただいているのは、やっぱりこれからというのは、学生の学びも重要だし、我々大人も人生100年時代、昔、学んだことでは、もうとてもじゃないけれども100年間生きていたら、知識も陳腐化してしまうので、大人も学び続けられる環境をつくっていかねればいけないと。そうしたときに、資源は限られているわけです。資源は。その限られた資源を、私が受けている感じだと、どうもみんなそれぞれの狭いところでしか生かされていない。これはもっと人口が多いところはそれでいいんです。人口が多いところは、学校の先生は学校の中だけ、もっと極限まで縦割りになってもいろいろな人が大勢いればできてしまうんですけれども。私は、長野県みたいに人口密度が相対的に低い場所は、一人多役の社会にしていけないといけないと思いますし、一人多役化したほうがむしろ一人一人の私たちは、いろいろな居場所もあるし、実はやりがいも出てくるんじゃないかというふうに思っています。

そういう形の中で、さっき言ってもらったように、例えば美術であったり、あるいは特定の分野のスポーツであったり、大都会に行かなくても一定の部分は経験できる、マスターできるとか、そういう環境をつくっていくには地域の人たちの知恵とか力を、多分、総動員していかないと無理だと思うので、ぜひそういう意味で、さっきご提案があった高校同士の連携だったり、高校大学の連携だったり、そういう話も壁を突き破って、せっかくある資源をみんなでシェアしましょうねという発想に近いので、ぜひ、ここだったら上伊那地域全体で、例えば美術の専門性を持った人たち、一体、学校にどれぐらいいて、地域にどれぐらいいて、そういう人たちがもっと協力体制を組んで、美術の能力を伸ばしたい人たち、若者たちにどうやってサポートできるかというのを、ぜひ一緒に考えられるといいんだろうなというふうに思います。

私は行政側というか行政の中にいるので、私はできれば、行政の中のそういうブロックは割りたいと思っていますけれども、ぜひ地域の中のつながりは、皆さんのほうで破っていただいて、それをみんなで持ち寄るといいんじゃないかなというふうに思います。

ぜひ、そうですね、ちょっとこの伊那にいてもいろいろなことが経験できるような、そうした教育のあり方というのはなかなか難しい部分があると思いますけれども、今みたいな視点で私は考えていきたいなというふうに思います。どうもありがとうございます。

ちょっと一通り、皆さんがおっしゃっていただいたことに対してコメントをざっとして、後でまたちょっと皆さんの意見を聞きたいと思います。

チーム蜂の子の皆さんの意見を聞きたいんですけども、若者が感じている楽しめる場所が少ない、これはほかのところでもよく出るんですよ。何があれば楽しいの。

【C チーム蜂の子】

松本に新しくできたようなショッピングセンターとか、ああいうのを誘致してもらえないかなというのが僕の意見です。

【長野県知事 阿部守一】

ショッピングセンター、なるほど。でもショッピングセンターを誘致しても、一定程度、人が行かないと、3年ぐらいしたらつぶれてしまいましたという話では、あまりよくないなと思うので。

僕は東京へ行って長野県出身の学生の人たちと話したときに、とにかく長野県はかつてよくないとかと言われたわけです。それから、例えば飯田の高校生と話したときには、せっかくこんないい環境があるからもっと森とか山の中で遊べるようにしてほしいと、アスレチックみたいな、というような話もあって、結構、この若者が感じている楽しめる場所というのは、結構いろいろあるんです。

では我々行政は何をすればいいのかというのが、正直、私もまだよくわからないんですよ。今日はせっかく若者がたくさんいるので、チーム蜂の子だけじゃなくてもいいので、どうすればみんな楽しめるの。何があれば楽しいの？今でも十分楽しいという人はどれぐらいいるんですか、逆に、今のままじゃもう、ちょっと不満だという人はどれぐらいいるの、では。そこに固まっているね、ではちょっとそこの3人と、あともう一人、後ろで手を挙げている人、そこにもいますか、では、ちょっとどうすればいい？

【参加者（高校生）】

自分の趣味としてやっていることなんですけれども、スケートボードの施設が少なく、で、公園とかでやっているとなんというんでしょう、邪魔者扱いで、嫌がられていると思うんですけれども。そういう施設をしっかりとつくってもらえばルールも守れると思うし、2020年のオリンピックに向けての準備だったり、そのスケートボードをやる人口が増えていくと思うので、そういう場所をしっかりとつくってもらえば自分たちは楽しいかなと思います。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。スケートボードってどれぐらい、みんなやっているの、みんなやるの、何人ぐらいやっているんですか、友だち。

【参加者（高校生）】

彼がやっています。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど。私ぐらいのおじさん世代になると、スケートボードがあるとそんなに楽しいというふうに、多分、共感できていないので、何かそういうものをつくらなければいけないという感覚を持っていないんですよ。でも、それ、市町村に言えば、それぐらいつくってくれるんじゃないの。

【参加者（高校生）】

前までやっていた場所がスケートボード禁止になって…

【長野県知事 阿部守一】

何で？危ないから？。

【参加者（高校生）】

ですから、何だろう、そこに書いてあった張り紙では騒音とか、植物とかの破損とか。そういうルールが守れてさえいればできると思うんですけれども、どんどん制約されて。

【長野県知事 阿部守一】

それは何かいいテーマだな。いいテーマだなというのは、若い人たちがスケートボードをやる場所がほしいと、でも騒音問題だったり、いろいろな問題があって、つまりだんだん制限がきつくなっていますというのをどう解決するかというのが重要な話で。多分、そういうところの何か一つ一つが解決されないと、積みり積もってこんなところに暮らし続けたくないなという話になってしまうんだと思うので、ちょっとそれ、どうしようかな。私の権限ではできないことがいっぱいありそうな気はするけれども、そのスケートボードの施設がほしいというのは、ちょっと私、ちゃんと受けとめておきますので、ありがとうございます。

【参加者（高校生）】

お願いします。

【長野県知事 阿部守一】

ちょっと、ほかの人は何がほしいの。

【参加者（高校生）】

すみません、さっきのショッピングセンターというのはちょっと周りの人の意見を言った提案なんですけれども。自分的には、僕、ドローンをやっています、結構研究していて、ここでもちょっと飛ばして毎日やっているんですけれども。

とにかくドローンを飛ばすのに、実験段階で広い場所がほしいんですよ。ただ伊那谷というぐらいなんで、広い河川敷もなく、今、ドローンを飛ばす実験の場所もなく、何で長野県、こんな自然、土地があるのに飛ばす場所がないんだみたいなという部分があったりとか。

【長野県知事 阿部守一】

飛ばせる場所がないの、だめなの？

【参加者（高校生）】

ドローンは電線から30m離れていないので学校では飛ばせないんです。航空法で電線から、要は第三者物件から30m離れていないと飛ばせないんです。許可がないと。なので、学校だとちょっとなかなか飛ばしにくいところもあったり、あとは、とにかく交通

の便ですね。道路の関係で、よく東京とか名古屋とかの専門学校の子に会いに行ったりしているんですけども、そうすると、やっぱり交通の便が悪くて時間もかかるという、そんなところですね。ショッピングセンターというのは周りの意見として、僕が一番ほしいと思っているのは、さっきも言ったんですけども、とにかく飯田線を速くしてほしいなという。

すごく、僕、自分でもすごくいいアイデアだなと思っているのがありまして、今言っていますか。

【長野県知事 阿部守一】

いいよ、いいよ、どうぞ、どうぞ。

【参加者（高校生）】

今度、あずさが新しくなるじゃないですか。新しい車両が出ると古い車両、あれ前にJR東日本に聞いたら、廃車にするとか、まだ使う予定が決まっていなくて言ったんですよ。あれはめちゃめちゃ性能いい車両で、飯田線なんかはスピードを落とさずに走れるので、あれを快速に流用していきたいなど。

【長野県知事 阿部守一】

いや、だけどスピードが遅いのは、あれはそもそも飯田線はこの線形が曲がりくねっているんだよ。

【参加者（高校生）】

そうなんです。あずさって、中央線のカーブでスピードを落とさなくてもいいように開発された車両なんですね。なので、それを飯田線に走らせてくれば、快速みたいにすげー早くなるなど。

【長野県知事 阿部守一】

では今度、JR東日本に聞いてみますね。

さっきのドローンの話は、東京よりはいいでしょ、でも。

【参加者（高校生）】

そうですね、東京なんかよりは全然いいんですけど。ただ、要はマルチコプタードロ

ーンという、いっぱいプロペラがついているのではなくて、僕がやっているのは固定翼タイプのドローンで、要は長距離を飛べるドローンなんです。要は、その場にいることができないドローンなんで、常に飛び続けなくてははいけないし、学校の敷地内では絶対無理なので、広い場所がほしくて。

【長野県知事 阿部守一】

そのうち、人を引きつける魅力的な県をつくる時に例えば今のドローンとかね、あと、その交通が不便で何とかしろという話、自動運転とか、多分、ここにいる高校生が大人になってしまえば、もうそういうのがバンバン走ったり飛んだりする世界になるのは確実ですよ。確実。もう確実にそうなると思うので、そのときにやっぱり今みたいな町のつくり方とか、君が言っているように、電線がいっぱいあったらだめみたいな話とか、あと道路交通法の規制とかも、相当変わっていかねばいけないと思います。

そういう意味で、ドローンを飛ばす場所みたいな話は多分、もう何というか、楽しみとして飛ばすのではなくて、過疎地域に物を運ばなければいけないとか、そういう実際的な需要として確実に穴を開けていかねばいけない話なので、ぜひ、非常にドローンに造詣が深そうなので、ちょっと意見を出してよ。意見出してよというのは、ドローン特区みたいなものをつくるとしたら一体何をすればいいのと。

【参加者（高校生）】

それ、前にあった「こんにちは県議会」に出しました。後で詳しくお話しします。

【長野県知事 阿部守一】

わかりました、わかりました。ではドローン特区をつくれれば楽しい？

【参加者（高校生）】

僕は、千葉みたいなドローン特区ができれば本当にもう…

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございました。

【進行役 佐藤 駿 氏】

伊那市もドローンで何か推進していますよね、市長が。

【長野県知事 阿部守一】

白鳥市長は、ドローンをバンバンやると言っているし。

【参加者】

僕もちょっとかかっているんです。

【長野県知事 阿部守一】

かかっている。そうそう、ちょっとではコメントしてくれる。

【参加者】

伊那市はこの間、ドローンフェスをやったばかりで、ご存じかと思えますけれども、鹿の検知の技術を開発するとか、あと、これは国土交通省と組んでですね。過疎地域への荷物の運搬、そういったのを手始めに、ドローン産業をこの伊那で育てていこうというふうになりつつあります。

ただ、指摘されたように、実際にここでだったら安心して飛ばせるという保障が、実はまだ確率してなくて、国土交通省の制度にのっとると、町中は許可が必要だと。ただ、ほかのところはどうなのかというのは、非常に不明確というか、曖昧なんですよ。市のほうとしては、いいけれども、ただ一言言ってねというような状態らしいんです。それもはっきりと明文化されていないので、飛ばす人たちにとっては非常に不安のつきまとう状態なので、例えば新山地区だとかそういったところはかなり広いエリアがあるので、そういったところを指定して、ここでだったらやりたい放題やっていいと、そういうふうにすればいいんじゃないかと。

【長野県知事 阿部守一】

いや、それいいよね。ちょっとやっぱり、私ももう年だなとはつくづく感じますけれども、ドローンを飛ばしたいとかスケートボードの場をつくりたい、つくれとか、そういう発想は出ないの、私、悪いけど。大体、時代遅れになりつつあるのかなと思えますけれども、やっぱりそういう意見をもっとバンバン出したほうがいいですよ。やっぱりちょっと我々も考えますので、ありがとうございました。

ぜひ、ちょっと県もドローンは、地域を暮らしやすい、あるいは暮らし続けられる地域にしていく上では重要だと思っているので、またちょっと教えてください。ではその後ろの方、どうぞ。

【参加者（高校生）】

自分、趣味がお菓子をつくったりすることがすごい好きなんですけれども、今までの中で、自分と同じくらいお菓子をつくるのが好きな子になかなか出会えなくて、ちょっとやるだけみたいな子ばかりで、現実でそういう話ができる子がなくて、でも、やっぱりほしいと思っているんですよ。

それで、そういう子に会える場所というのがほしいなと思って、学校って数百人じゃないですか、なので、もっとほかの高校の子たちと会えるような場所があれば、もしかしたら同じような話ができる子たちに会えるんじゃないかなと思ったりして、なので、もっと学校のくくりがなく、同じくらいの世代の子たちが何か好きな話ができるような空間をつくってほしいなと思って、その空間の中でぜひやりたいことが同じような子たちと一緒に何か目標を立てて、ボランティアでもいいし、何か企画を成し遂げてみたいなのというのもあって、なので、何か高校生が集まって企画できるような場所が必要だと思いましたので。ぜひ、企画したらその企画を手伝ってくれるような大人の人たちも出てきてくれたらすごい、何か自分たちで設置もできるし、地域にもすごい貢献ができるんじゃないかと思ったりして、そういう場所をつくってほしいです。

あともう1個、ちょっと話がかわってしまうんですけども、ぜひ今後で言いたいなと思っていたのが、農業高校にもうちょっとお金がほしいなということです。

【長野県知事 阿部守一】

ストレートなご要望、ありがとうございます。

【参加者（高校生）】

雨漏りとかがすごいするんですよ。あと、すきま風とかがすごくて、何かもう生徒の中には牛舎のほうがいいんじゃないのという子もいるんですよ。農業って、もう人間と切り離せないじゃないですか。農業校にいる子たちはもう未来の日本を支えるといっても過言ではないと思うんです。なので、もうちょっと未来を支える子たちがいっぱいいる学校に、もう少し支援をしてほしいなというふうに思います。お願いします。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。ちょっと前段の話は、佐藤さんに少しコメントしてもらったほうが何か話しが楽しくなるような気がするの。ちょっと後半だけ。後半の話は、さっきもどこだっけ、学校が寒い、チームいなごか、高校が寒いと。これ、もうどこに行ってもこの話が出るのよね。それで9月県議会でこの間、やっとトイレの洋式化を多少は進めますみたいな予算を出して、議決してもらったんですけども、これ、何でもここまで放っておいたのと思いますよね。ちょっと、何とかします。

私が知事になってから、今まで学校の補修、維持補修の予算はこれでも増やしたんです、増やしたの。増やしたけれども、まだ全然足りていないんだろうなというふうに思うので、これは今度、高校のあり方、高校の再編をどうするかということ議論するので、その高校の、何というか配置をどうするかということだけじゃなくて、高校生の皆さんにどういう学びを提供するかということは、周りに先生方もいらっしゃいますけれども、そこはやっぱり新しい教育のあり方を考えていかなければいけないと思いますし、それと同時に、施設の話は、教育委員会とはもう話はしています。していますけれども、べらぼうにお金がかかるので、もうちょっと、私は正直いって、知事だからこんなことを言っただけじゃないけれども、昔から順番に計画的にやっておいてもらえばよかったのになという感じがあります。

でも、皆さんの気持ちはよくわかりますので、さっきの寒い話とか雨漏りする話とか、ほかのところでも、エアコンをつけるとかいろいろなことを言われていますので、ちょっとそこは頭にしっかり置いて対応していくようにしたいと思いますので、よろしくお願ひします。

ちょっと、では前段のほうは佐藤さん、何かいいアイデアはないですか。

【進行役 佐藤 駿 氏】

さっきのお菓子づくりの話とか、何かドローンの話とか、やっぱり、あのお二人、多分、オタクなんですよ、どうやら。お菓子オタクとドローンオタクで、多分、好きだからあれだけ熱量があって、知事も最初おっしゃったように、嫌々やっているやつと、自分が好きだからこやるものって熱量が違うので皆さんに伝わると思うんですよね。

だから何かそこを、知事が最初におっしゃっていた学校との分業化、タスクを、多分、向き不向きがあるので、人間には。やっぱり先生も多岐に渡ると、教えるのは得意だけれども、何か体育とかはやりたくないとか、多分、人間なら絶対あると思うんですけども、そのやっぱり、自主的に熱い思いがあるところを専門的にやるというのがすご

い僕は大事なのかなと思うので、ぜひそこのオタクを伸ばしていただいて、ぜひその、自分で何かインプットして持っておくだけじゃなくて外にアウトプットする、出していく、自分の考えとかを、ブログとか何でもいいと思うんですけども、出していくと、結局、連携をして自分だけでとどめておくだけの世界で終わらなくて、何かこれからどんどん雪だるま式に何かチャンスが増えていって、そこにいわば乗っかっていくみたいな、そういうのが大事だなと僕は思ったので、ぜひやっていっていただけるといいなと思います。

専門の役割ですね、僕、建築屋をやって、今、ITをやっているんです。これ全然業界が違うんですけども、ある程度、両方の業界も専門的にわかっていて、この2軸を掛け合わせたこの真ん中の色が変わるようなところに1カ所が出てくるような違いになってきているなと思っているので、何か1個じゃなくて2個ぐらい専門的なものを持っていると、非常に人材として価値が高くなっていくのかなというふうに思いました。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございました。僕は、何というか、今までの日本の社会というのは何となくジェネラリスト型社会で、何か、例えば学校の勉強だったら、国語、算数、理科、社会が万遍なくできる人が何か勉強ができる子みたいな話だったんですけども、私はこれからは絶対変わらと思っています。何かすごいここだけ尖がっていると、こいつ、ほかのところは大丈夫かというような人たちがこれからは活躍していく時代に私はどんどんなっていくんだろうなというふうに思いますし、ちょっと僕は佐藤さんにあえて振ったのは、佐藤さんは自分で起業してやっているわけですね。僕は、今の話も人に頼む前に自分でやったほうがいいかなというふうにも思うわけです。例えば、今、SNSがいっぱいあるので、例えばもう県内の高校生でお菓子好き、この指とまれみたいな発信して、そういうのをどんどんつくっていきけるし、ちょっとアプリが必要なら佐藤さんにつくってもらえばいいですから。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そうですね、やっぱり自分でやっていくというのが一番大事だと思います。やっぱり県とかに要望するのは簡単、言うだけなので。でもやっぱり結局、実行しないと何も変わらなくて、さっきの勉強したらからって、勉強したのをためておいてもしょうがないから、やっぱりやるしかないんですよね。もうやる、一歩前に踏み出す勇気。もう一歩を踏み出してしまえばもう歩くしかないの、一歩踏み出せばいいと思います。高校生

だからとか関係ないと思います。

【長野県知事 阿部守一】

高校生起業家も世の中、いっぱい出てきますよね。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そうですね、僕、ファンド出資してもらっていて、東京の。そのファンドの出資先のグループの中に中学生で起業した子がいて、14歳で出資を受けていました。もう会社をつくっていました。プログラミングをやっている子なんですけれども、もうそんな時代ですね。

【長野県知事 阿部守一】

ではドローン会社とお菓子会社をもうすぐ。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そうですね、もうとりあえず会社をつくってしまえばいい、そんなリスクないから。

【長野県知事 阿部守一】

企業支援は県もしっかり応援しますから、よろしくお願いします。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そんな感じで、僕、コワーキングスペースをやっているんですけども、やっちゃえばいいんですよとあって、今、多分、4年くらいで20人くらい起業しています、実際にもう始めてしまっています。さっき言ったように、一歩踏み出せばもうやるしかないから強くなります。もうその後、僕は何もしていないんですけども、人は増えています、確実に。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。あと車がないと移住してきても困っちゃうと、シェアタクシーが大事だという話がありましたけれども、今、県でも総合5か年計画にあわせて、具体的にどんなことを考えているかということの中でも議論していますけれども、その中でもシェアリングエコノミーをつくったらどうかという議論もしています。

これちょっと公共交通の話は、バス事業者とかタクシー事業者の皆さんとも話をしていかなければいけないので、何というか、シェアリング、カーシェアリングできたけれども、例えば、バス会社とかタクシー会社が全部なくなってしまったみたいな話になっても、これまたいけないというところもあるので、そこは我々も十分、問題意識を持って取り組んでいくようにしています。チーム蜂の子はそんなとこかな。あと、飯田線が言われたけれども、飯田線はちょっとJR東日本に、あずさの話は聞いてみますので。

それからチームざざむし、チームざざむしは移民。移民はちょっとよく激論したほうがいいかもしれないから。

この間、私、中国へ行っていきました。中国。中国へ行っていろいろな話をしてきたんですけれども、その中の一つの項目に農業実習生の受け入れ、今でも、例えば川上村とか南牧村は中国とかベトナムから多くの農業実習生が来ています。そういう人たちがいるから何とか農業ができているというのが、もう既に現実の世界になっています。移民を受け入れる受け入れないの議論を日本国としてはあまり、何か国民的議論になっていないけれども、しかしながらもう実際、部分部分ではそういう動きが実際のものになってきています。

ディベートでその移民、受け入れ賛成派と反対派で分かれて議論したと思うので、できればどういふ議論だったか、私も教えてもらいたいと思いますけれども。やっぱり日本の社会、今、例えば長野県の有効求人倍率が1.6をずっと超えていて、人手不足。これ農業に限らず、製造業とかあらゆる分野で人手が足りないという状況になっています。

私たち行政が一番、今、例えば地域の経済を支えていく上で重要な課題だと思っているのは、この人材確保とか人材養成をどうするかということが最も重要なテーマです。さっきも言ったように農業とか、あるいは介護分野も、少しずつ海外から受け入れてもという話が進みつつありますけれども、どこまで受け入れるべきかというのは、相当、慎重な議論をしていかなければいけないなというふうに思っています。

さっき僕は佐藤さんとお話したんですけど、日本は、もう確実に人口は減ります。だから、その人口が減っている部分を誰かの力で穴埋めしなければいけないということは、多分、ほとんどの人たちの共通認識になってきているんだと思いますけれども、片方で、この次期総合計画の中にも書いてあるように、長野県を取り巻く状況のところ、例えば技術革新とグローバル化の急速な進展とかと書いてありますけれども、例えばAIとかロボットとか、今いる我々が、人のパワーでやっている分野の仕事というのはもう20年、30年たつと、相当程度なくなってしまうとか、置き換えられてしまうだろうというふうに言われています。

そういう社会を考えたときに、人口が増えていったほうがいいのか減っていったほうがいいのかという、これいろいろ議論はありますけれども、日本はしばらくはもう確実に人口が減る社会ですから、私はむしろA Iとかロボットとかどんどん、世界に先駆けて導入していくことによって、この人口減少社会に適合した対応をしていくということが実は重要なんじゃないかなというふうに思っています。

中国、私、行ったとき、中国語、私は読めないの、中国の新聞も英語版を見ていたら、中国が東京オリンピックまでには新幹線の自動運転やりますと書いてあるんですね。私は中国の人にそれを見て言ったんですけれども、こんなに人がいっぱいいて、北京も市内だって交通整理を人でやっているわけです。信号もあるけれども、交通量が多いから人手で。こんなに人がいるのに自動運転やる必要がないじゃないかと私は言いました。むしろ自動運転とか、A Iのロボットが必要なのは人口減少になっている私たち日本のほうが大事になっているので、ぜひ、この移民の問題も、その移民の話だけじゃなくて、この技術革新とか産業分野、どうしていくかということとセットで考えていく必要があるのかなというふうに思っています。ちょっと、その移民ディベートをやった流れのことを少し、もうちょっと紹介してもらえるとありがたいんですけれども、いいですか。

【参加者（高校生）】

昨日おとといとディベートの県大会で、移民政策について話してきましたんですけれども、やっぱり私の意見からすると、移民を受け入れたほうがいいという肯定側のほうが比較的、試合が勝ちやすかったかなというふうに思います。

移民を受け入れるにはたくさんのメリットがあって、さっきも言ったんですけれども、人口が減少することによって働き手不足に陥りそうなときに、移民で人手は圧倒的に解消されます。さっきもおっしゃっていたように、農業分野で言うと人手が不足していて、農業をやってくれる移民が増えると、その生産性が上がったりとか受給率が回復したりして輸入品に頼らなくて済むだったりとか、介護をしてくれる人も圧倒的に少なくなってしまって、高齢化が進んでいる日本にはそれは大きな問題で、A Iとかロボットを受け入れるから移民は要らないという反対意見もあったんですけれども、A Iとかを受け入れるときの初期費用のほうが、移民を受け入れたときの人件費よりも高くてしまったりとか、介護分野でもロボットとかを導入したときに、介護をされる側としては、ロボットとかよりも人に介護されたいというご老人もたくさんいて、そういう面でやっぱり移民は必要だなということを感じたんです。

移民を受け入れるに当たって言葉の壁というのが結構あって、私もアメリカに10年住

んでいて、日本に来たばかりのときは日本語がそんなにできないので、コミュニケーションをとるのが結構大変だったなというふうに思います。伊那に住んでいる外国人の方とかと交流したときに、やっぱり、その外国人同士で会話ができる場だったりとか、日本人ともうちょっとコミュニケーションをとりたいんだけどもとり方がわからないとか、チラシとか広告とかが読めないとか、そういう問題があったりするので、やっぱりそういう外国人を受け入れられるように、外国人を受け入れることでメリットはたくさんあるので、もっと受け入れるように私たちが変わっていく必要があるのかなと思います。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど、はい。どうもありがとうございました。

【参加者（高校生）】

私も移民を受け入れたほうがいいじゃないかなというふうに感じたんですね。日本政府は移民政策をとらないというスタンスというのは承知をしておるんですけども、世界の人口がますます増えます。日本は2050年には1億人を切るというふうに言われております。また、今の外国人の日本の比率というのは約1.8%、OECDでは、小国では最低と。平均値でいくと8.1%ということですね。だから、今の日本の数から行くと、あと3倍ぐらいいを受け入れて大体OECDの半分ぐらいになりますよということになります。

企業のほうから見ていきますと、例えばAIという話がありましたけれども、アメリカが一番進んでおります。あれは、やっぱり移民のアメリカ、インドだとか、優秀な人材によってそういう企業が発展しているということだと思っただけですね。で、やっぱり人口が減るというところについては、大体、経済活動がだめになっていくというのが歴史が証明しているわけで、そういう意味からいっても、減ってくる分については移民の受け入れで国が成り立つような形がいいんじゃないかと。具体的にいえば、北欧諸国なんかはほとんど移民で成り立っていますので、そういう意味で、やっていけばいいと思うんですが、いかんせん、その受け入れ側の環境の醸成というのがやっぱり必要になってくるのかなと。だから、ある程度の長期の中で、本当に今、言われた必要のところから順に順にやっていく。環境の醸成をやっていくということを長野県がもっと発展していくんじゃないかなと、こんなふうなことを思っております。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。この問題は非常に奥が深い問題だと思っています。私は基本的には社会は多様性があつたほうが良いと思っていますので、今でも長野県在住の外国人の方々、いっぱいいらっしゃいますし、そういう人たちを、地域を支える構成員として、一緒になって取り組んでいく社会をつくっていくということが基本的に重要だと思っています。

ただ、その産業の分野が県に着目したときに、単に安い労働力だからということで受け入れていると中長期的には日本経済が発展しないで、むしろアジアの各国のほうがどんどん発展しますから、その何とというか、安上りの労働力として使うような発想で受け入れていくのは、私は懸念はあるんだろうなというふうに思います。むしろやっぱり対等協力的な関係で、高度技術を持った人材、先ほどの、例えばインド人なんか世界で活躍されているわけですから、要するに高度人材は受け入れていくというような方向はあつてもいいと思いますけれども。

今、日本の産業分野を見ていると、実はミスマッチが起きているところは、どっちかというとならやっぱり賃金水準が安いと、そこは人が行かないと。だから、では外国人という話の方向に走り過ぎるとこれはちょっと中長期的にはリスクがあるんじゃないかなという感じもするので、そこはやっぱり国全体でしっかりと方向づけしていく必要があるだろうと思いますが、私は基本的には多様性があつたほうが良いと思います。

例えば中国へ行って私が話している感じは、例えばうちの信州大学も、あるいはほかの大学も結構、中国からの研修生を受け入れているわけです。でも中国の人たちに言われるのは、日本の学生がもっと来てほしいと。日本のほうが外国に行っていないんです、日本のほうが。これ、やっぱり多様性ある社会をつくる上では、もちろん外国の人たちも受け入れていくということも必要ですし、もっと若い人たちを中心に、もっと海外にこっち側からもどんどん出かけていく必要があるのかなというふうにも思います。

それから、ではもう一つ「チームいなご」、地域のことを学びたい、県のイベントなどデジタルサイネージを学校に設置してイベント情報がわかりやすく交流しやすくしてくれている話は、これは、さっきの学校施設が寒いとかベーシックなところがないのにそこまでやるかという感じはありますけれども、優先順位をどちらに置くかですね。

多少、寒いのがまんしてもそっちを先にやるという手もなくはないなというふうに思います。ちょっとそこは考えますけれども。むしろ、そのイベントの話だとか交

流の話は、さっきのお話のように、お金をかけなくても多分できる部分があるんじゃないかと思いますので、それぜひ一ちょっと一緒に考えてもらえればいいなど。

それから生徒が話を聞きたい人をリクエストできるようにというのは、これは全く、私、大賛成ですけれども、今できないんですかね。

【参加者】

ちょっといいですか。私の娘が小学校の先生をやっております、それでさっきも話がありましたように、美術の授業のときに、検定の上位入選者を連れていって授業をやったそうです。そうすると子どもたちがすごくイキイキして、ものすごく絵が好きになったということなんですね。もう一つは農業みたいな授業がありまして、それは地域のお百姓さんをお呼びして、一緒に教えてもらいながらやると。それで収穫できたときに料理を振舞ったと、呼んで招待して。そうしたら、そのお百姓さんものすごく喜んだと、こういうことを話を聞きました。

ところが、校長先生によってはOKを出してくれるけれども、ある校長先生ではOKが出てこないというんですね。だから、知事の考えは私も非常にいいことだと、地域であり、企業であり、学校を結びつけると、そこからまた新しいものが生まれてくる、この考えは本当にいいと思うんですけれども、現実的にはそういう校長先生の考え方によってその辺が変わってくるということなので、ちょっとその辺について、お願いしたいと。

【長野県知事 阿部守一】

わかりました。明日、ちょうど教育委員の人たちと話す機会があるので、早速、ちょっと言ってみます。

県の教育委員会と市町村の教育委員会があって、小学校、中学校は市町村教育委員会が所管しているので、これはまた県はすごく間接の間接になってしまっているんですね。だから、これ小学校、中学校の話は、ぜひ市町村の教育委員会のほうに皆さんも言ってもらいたいと思いますし、私のほうからは少し、そういう問題提起はしていくようにしたいというふうに思います。

そういう、私、生徒たちが主体的にやっぱりこういう人を呼びたいとか、こういうことをやりたいとか、こういうものを知りたいとかという、その思いが私は大事だと思うので、それはやっぱりできるだけ尊重できるようにしていかなければいけないなというふうに思ってお話を聞いていました。

それからバス代が高いという、これはまたストレートな話で、これも問題ですよ、問題というのは、さっきの地域の足、地域の交通手段をどうするかというところで考えなければいけないテーマだと私も思いますので、そこもしっかり受けとめますけれども、ちょっとそのバス代が高いという話、これ通学に使っているの、それとも遊びに行くときに使っているの？

【参加者（高校生）】

通学に使っていたんですけども、高いので安くしてほしいという、本当にそれだけなんです。

【長野県知事 阿部守一】

それは何、お父さん、お母さんがそういうふうに思っているの、それとも君自身が、ちょっとこんなに高くは大変だと思っているの？

【参加者（高校生）】

自分も思っているんですけども、バス代を親に請求するときに親の顔がどうにもおっかなくて、そこですね。

【長野県知事 阿部守一】

そりゃそうです。本当は学生は均一料金とかね、どこまで乗っても。遠い学校へ行くとお金がいっぱいかかるし、近くだと安いというのは何か交通が不便なところに住んでいるとハンディキャップになってしまいますよね。ちょっとそこは、何か名案が誰かあったら教えてもらいたいなと思いますけれども、どうぞ。

【参加者（高校生）】

例えばなんですけれども、伊那市は国土交通省の自動運転の実証実験の場所に認定されたじゃないですか。あれに近いような形で県で特区みたいなものを設定して、通学用のバスを例えば自動運転でやるとか、そうすると人件費ですね、1番ネックになるのがおそらく。そこら辺をまず確保できるということと、自動でやりますので、本数が増えなくてもそんなに問題ないんじゃないかなという感じがするんですが、その辺、どうですか。

【長野県知事 阿部守一】

自動運転のレベルにも寄りますけれども、ゴルフ場のカートに毛が生えたぐらいのは県レベルでもできるけれども、最先端の自動運転はまだまだちょっと県レベルでは難しいですね。

むしろ、さっきのはカーシェアリングみたいな話で、学生の移動は何か例外扱いにするとか、そういう仕組みのほうが実現性があると思います。ただ、その自動運転も確実にもう、もう実現していきたくらうと思うので、それが実現すればもうそういう形で対応できると思いますけれども。

その前の段階としては、なかなか県が独自で自動運転の特区をつくっても、やっぱり県自体が自動車をつくるわけではないので、そこは難しいとは思いますが。

だから高校生の通学の足は、例えば道路の走行の特例ですよみたいな話のほうがまだ実現可能性は高いような気がします。これも既成の壁があるから難しいですけども、ちょっと、いずれにしても問題意識は共有させてもらいますので、よろしく願いします。

あと、一応一通り、皆さんのチームからのご提案について私もいろいろ受けとめさせていただきながら、コメントさせてもらいましたけれども。あと佐藤さん、このいろいろな話題とかテーマの中で気になったこととか、少し、あと20分あるので。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そうですね、いろいろ本当に年代によっても多分、いろいろなインプットがあって、当たり前な価値観が違うので、同じ現象でも受け取る情報が違うので、すごい難しいなと。知事の立場として僕なんかは今、聞いていたんですけども、何かいろいろなことをやっぱり考えないといけない、俯瞰して。長野だけじゃなくて日本とか世界の流れとかの情勢も見なきゃいけないし、その中で僕らみたいな民間のプレイヤーは、要望を言うだけじゃなくて、さっきも言ったんですけども、やっぱりまずやっていくと。やっていった中でその数値をとって、こういう数値が実際にできていて、これを県の中で県の資源ですね、リソースを使って伸ばしたらいいんじゃないかみたいな提案のほうが、より具体的に進むスピードも早そうだなということを、今、強く思いました。

あと、実際、知事に直接会ってこうやって話す機会というのはなかなかほかの県はないのかなと思っていて、とてもいい会だなと思っています。実際、多分、今、伝えなかったこととかというのはあると思うんですけども、そこはアンケートのほうとかにも書いていただいて、多分、知事は見ていただけると思うので、そこを具体的により書い

ていただけると、実際、その次の5か年計画の中に今日のことが反映されているなとわかると、より行政の目線とかを持てるようになるのかなと思うので、ぜひ書いていただければなというふうに思います。こんな感じでよろしいですか。

【長野県知事 阿部守一】

あと何か皆さんから、この際、もう少し言いたいということは。

【進行役 佐藤 駿 氏】

そうですね。では自由に発言するのを、10分ぐらいですか、とりたいと思います。何か質問とか言いたいことがあれば。

【参加者（高校生）】

私はアツモリソウという絶滅危惧種の保護活動をしているんですが、単刀直入に言いますと、その資金がほしいですね。その研究のための資金がほしいんです。

今、花を咲かせる、本当に手前の段階まで研究活動というのは進んでいて、それを実現させるための、ちょっといろいろな実験を進めていきたいと考えているんですが、そのためのやっぱり資金がどうしても足りなくなってきているので、その資金がほしいというのと、あとアツモリソウは美ヶ原という、松本にあるところに自生をしまして、そこに観察しに行ったりですとか、あとアツモリソウに関する情報をやっぱり地域の方にいただいたりとかする際に車での移動になるんですが、その際、今までは先生の車で移動していたので、その際にやっぱりハイエースみたいな、もうちょっと大きい車があると、その活動ができるかなと思っていて、なので、そうですね、お金と車がほしいです。お願いします。

【進行役 佐藤 駿 氏】

ちなみにアツモリソウというのはどんな花、花なんですか、草なんですか。

【参加者（高校生）】

花ですね。ちょっと画像でお見せします。

【進行役 佐藤 駿 氏】

何で絶滅危惧種なんですか。

【参加者（高校生）】

自然界ではすごく低い確率でしか開花しないという花でして、あと、今、鹿による食害とかがこれ問題になっていて、そういう影響でもうどんどん自然に咲いている花をもどんどん数が減ってしまっていて、僕たちはそれを人工栽培をしているんです。

自生地のアツモリソウを人工授粉をさせまして種を採取して、それで学校のほうで無菌播種、菌がない状態で培養瓶という試験管の中でまず種の状態から開花させて、そこから外の環境に慣らして、また自生地に戻すという活動なんですけれども。

【長野県知事 阿部守一】

そうね、難しいな。お金がほしいというリクエスト、よくわかりましたけれども、それは学校の部活でやっているの？

【参加者（高校生）】

そうです。

【長野県知事 阿部守一】

見せてもらったことがあるんですけどアツモリソウ、今は活動資金はどうしているの？

【参加者（高校生）】

民間企業とパートナーシップ協定を締結して資金をいただいているんですけども、それでもちょっと足りないのが現状なので自分たちのやりたい思いを、研究をやるためにはもうちょっと、もっとほしいなど。

【長野県知事 阿部守一】

そうね、何というか、知事なんだから金を出せと言われてれば、全く出せない中身でもないような気がするんだけど、それをやり出すと、ではあっちの研究、こっちの研究というのを、たとえ10万円ずつでも積もり重なると、もうめちゃうちゃべらぼうなお金になるので。

今、パートナーシップの話があったじゃないですか。その希少な植物なので、そういうものをやっぱり守っていかなければいけないという人たちが、思っている人たちはい

っぱいいるはずなんですね。だから、例えばクラウドファンディングみたいな形で集めるとか、あるいは、ちょっとこれ我々ももう少し汗かいてもいいような気がするんですけども。企業の人たちに働きかけて、やっぱりうちの企業はこういう希少植物の保護に協力しますみたいな広告を打っていいから、ちょっとお金を貸してねとか、何かいろいろやりようはあると思うんですね。

そこは、本当は、県の地域振興局とかで考えたほうがいい話だと思いますし、ちょっと私もアツモリソウの話は前から聞いているので、ちょっとインプットして、何かいい仕掛けを一緒に考えましょう。

税金で補助金をもらうといろいろなことを言われるから、あまりもらわないほうが私にはいいと思っています。こういう何か説明責任を果たせとか、こういう使い方をしはだめとか、旅費には充てるなとか、いろいろなことを言われてしまうので。柔軟な集め方をしたほうが発展性もあるし、継続性もあるかなというふうに思っているので、またちょっとそこは教育委員会とも話して考えるようにしたいと思いますので、よろしくをお願いします。

【参加者（高校生）】

ありがとうございました。

【進行役 佐藤 駿 氏】

はい、ありがとうございます。では、次、どうぞ。

【参加者（高校生）】

先生が多忙という話で、今のこの就職とかそういう時期になると、先生たちが就職先のところに話に行ったりとかすると、授業が自習になってしまうんです。なので、1週間国語がなかったりとかそういうときがあって、それを聞いた親が、高校は義務教育じゃなくて金を払っているんだから、ちゃんと先生に教えてもらえと言って、そういうことを言うので、その就職のことだけをやる先生とか、そういう人を立ててちゃんと授業を受けられるようにしてほしいというのと、ちょっと自分は筋肉オタクで、その筋肉オタクからの要求すると、施設としてもうちょっと体を鍛える、そういう公園がほしいということ、これ、健康寿命にもかかわってくると思って、おじいちゃんとかになってから鍛えようとする健康寿命というのはあまり伸びないんですよ。でも、30歳から鍛えていってやると健康寿命というのはかなり伸びるんです。だからもうちょっと、今の世

代から自分たちが鍛えられるそういう場所がほしいなというのがあって、あと、さっき外国人の人たちが話せる、その移住してきた人たちと話したりできる場所がほしいというので、今、ジムとかに行くとやっぱり体を鍛えているのって海外の人が半分以上で、いっぱいいるんですよ。やっぱり、だからそういう体を鍛えられる公園とかそういうところをつくってもらうことで、海外の人たちとの交流の場もつくれるかなというのがあって、そういう鍛えられるところをつくってほしいなと。

今、自分が家の近くの公園で、もう本当に器具もないところで、ジムも行くんですけども、ジムに行けない人が鍛えるんですよ。そうするとやっぱり変な目で見られるので、本当に。だからちゃんとした場所がほしいなと。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど、いや、いいですね。まず最初の話は本質的な話だよね。学校の本質。そういう話をやっぱり教育委員会の人たちにちょっと共有していかなければいけないと、私も思います。授業料を払っているんだから当然だと私も思いますので。

これ、学校の先生から見るとどうなんですか、そういうふうになっていることについては、どんなふうに感じていらっしゃるんですか。

【高校教諭】

うちの高校って、結構、地域を出て行く授業もあったりして、進路指導の先生も就活のときなどは外へ出て行かれる先生もいて、授業交換というのをできるだけやろうとしているんですけども、それが無理な場合は、自習という形になってしまうことがあります。本当にそこが学校側としても考えているところで、できるだけ自習がないように放課後、何かをするとか、外へ出る活動も放課後にしようとか、休みにしようとかとあるんですけども。さっき言ってくれた、特に進路などは、もう待ったなしで外へ出ていかなければいけないというところがあって、それで自習になりますというふうに思っているんですけども。

さっき言った、地域とかかわろうとすると、やっぱり土日というのは地域の方たちが休んでいたりするので、そうすると、例えば小学校に、例えば美術や書道でも教えてに行くということになると、どうしたって学校があるときというふうになると平日になるので、そこで出て行くと、その先生の授業が自習になったりというところは現実にあります。

【長野県知事 阿部守一】

この学校をどうするかというのは、ちょっと私も現場のことがよくわからないところもあるので、しっかり真剣に考えるようにしていきたいと思います。それから体を鍛える場所ね、これは公園に器具を置いてもらえばいいですか。

【参加者（高校生）】

そうですね、やっぱり海外とかだと、すごい器具がそろっていたりしているので、海外の人たちは公園で鍛えることが、身体にしみついているから、日本人もやっぱりどんどん鍛えていかないと。

【長野県知事 阿部守一】

私もその意見は賛成なんですよ。何か、うちの県の公園というのは何かそういうのがないよね、全然。

【参加者 男子】

全然ないです。

【長野県知事 阿部守一】

何か、そういう体力づくりに資するような施設があったほうが私もいいと思いますので。

【参加者 男子】

若いうちからどんどん、もう老けてきてからはもう遅いので。

【長野県知事 阿部守一】

何か生き生きしているよね。やっぱり自分の好きなことを語ると目が違うよね。わかりました。でもほとんどの公園は市町村が設置しているので、長野県の県立公園もあるけれども、例えば松本平広域公園とかそういうばかでかい公園とかになってしまうので、本当は身近な公園にもっとそういうのを置きましょう運動を、さっきの健康寿命が短いんじゃないかというお話があったので、ちょっと少し、そっちのアプローチから考えていくようにしたいと思います。ありがとうございます。

【進行役 佐藤 駿 氏】

では、ちょっと時間も残り少ないので、まとめに入りたいと思います。伊那会場、どうやらオタクばかりいるので非常に熱量がある人が多いなと。おそらく、ここに来ていない人もオタク力がすごいある人がめちゃくちゃいると思うので、変な地域だなと思いつながりながらも、熱量があるのでとてもいいなと僕は思いました。

では最後に、知事から今日のまとめをいただきたいなと思っていて、その後、写真撮影を皆さんでできればなと思います。知事、よろしくお願いします。

5 知事総括コメント

【長野県知事 阿部守一】

どうもありがとうございました。ちょっとまだ話足りない方もいらっしゃると思いますけれども。今日は長時間、この県政タウンミーティングにご参加いただきまして、まずは感謝申し上げたいと思います。いろいろお話をいただいたので、しかも今日は結構、具体的な話がいっぱい出て、ありがたいなというふうに思っています。

長野県の総合計画、今、皆さんにもお示したような「学びの県づくり」「産業の生産性が高い県づくり」「人をひきつける快適な県づくり」「いのちを守り育む県づくり」「誰にでも居場所と出番がある県づくり」そして「自治のカミナぎる県づくり」ということを基本方針にしていこうというふうに思っています。思っていますが、ここにこういふように書いてあるものというのはそれぞれ全部、実は全て関係性が私はあるというふうに思っています。

例えば人を引きつける県にするためにも、例えば学びの環境は重要な話だというふうに思っていますし、あるいは、誰にでも居場所と出番がある県。例えば多様性のある県をつくっていくことが、実は産業の生産性、競争力を上げていくことにつながるだろうというふうに思っています。一応、何となく分野的に分けるとこんなことをやっていかなければいけないなと思っていますけれども、さらにこれをもう少し横串を刺して、プロジェクトチーム的に対応していくテーマ設定を考えていきたいなというふうに思っています。

そういう意味で、皆さんから今日いただいた話の中で例えば多世代交流の話であったり、あるいはちょっと、公園の施設のところまではどこまで踏み込めるかというのはありますけれども、やっぱり健康寿命、健康な社会をどうつくるかという話であったり、あるいは学校、私は開かれた学校、学校と社会がつながるといふのはやっぱり、今日も

皆さんと意見交換をしてもう不可欠だなというふうに思っていますので、そういう課題であったり、あるいは地域の交通、バス代が高いという話とか、こんなに交通が不便だったら移住者も受け入れられないとか、飯田線、何とかしろという話とか、交通の話も、これも極めて重要なテーマだというふうに受けとめさせていただいています。

これ、またぜひ具体化を皆さんの思いを受けてしていきたいと思っていますが、ぜひ、最後にちょっと私から皆さんにお願いしておきたいのは、全然、佐藤さんとは何も打ち合わせをしていないのですけれども、佐藤さんのMCでも何回か言ってくれたので、やっぱりできることは皆さんでやってほしいなと私は思っています。さっきのアツモリソウの話も、何というか、そうだね、では県が補助金を出すことを検討しましょうとかと言っておけば、もしかしたらいいのかもしれないけれども、多分、私、補助金でやらないほうがいいと思っています。あるいは県の税金でやらないほうが長続きすると思います。

県の財政、結構厳しい中で、何というか、アツモリソウをどうするかという話を継続的にやっていく上では、もうちょっと違う形で資金を捻出する工夫をまずして、どうしてもだめなら、誰もそんなものに関心を持たない。もう誰も民間企業も関心がない、地域の皆さんも、そんなものを放っておけという感じだったら、最後の最後、絶滅してしまうのはいけないから県が出すという形もあると思いますけれども、私の感覚だと多分、もっとアピールをすると関心を持ってもらえる人がいっぱいいると思います。それ、だって皆さんがそれだけ熱意を持ってやっているわけですから、それ絶対、私は人に伝わると思うので、あえてちょっと何かほかの事を考えましょうと言っておきます。

佐藤さんも随分言ってもらっているんですが、やはり自分たちでやれることは自分たちでやってもらいたいと私は思っています。県知事がこんなことをいうと、お前、何だと言われるところもあるんですけども、やっぱりこの総合計画の一番頭が学びの県づくりですね。一番最後に書いているのは自治のカミナぎる県づくり、自治というのは、県とか市町村も自治でありますけれども、地域のコミュニティであったり、それぞれのいろいろなことを取り組んでいる団体も自治があるわけです。自治というのは、人から何だかんだ言われなくて自分たちでやらなければいけないことは自分たちの責任でやっていきましょうというのが基本的な考え方です。

長野県は例えば消防団活動も盛んな県であります。あれなんかみんなボランティアですよ。ボランティア。消防の活動、こんなに朝から訓練しているんだから給料を寄せとかというふうに消防団の人たちがみんな言ったら全然成り立ちません。世の中もそれと同じで、やっぱり地域の人たちができることはやっぱり最大限やってもらって、我々

県は市町村のさらに広域の行政ですから、そうはいつでも、こんなものは地域の力だけじゃ無理だよという部分については、責任を持って対応をしていきたいと思っています。

そういう意味で、この自治の話というのはそれぞれの人たちが自分たちでできることは何かというのを、もう一回、私は考えてもらいたいなというふうに思いますし、自分で考えて取り組んでいくほうがよほど、私は楽しいことがいっぱいあると思います。だけど、どうしても税金でやらなければいけないものも世の中にはたくさんあります。子どもたちの格差、貧困をなくすためには、やっぱりこれは税金を投入しなくてははいけないと私は思っていますし、さっき言った公立学校の施設整備をするのは、これは寄附に頼るのではなくて、そんなものは税金でやれと言われて当然の話だと思っています。そういうことはしっかり考えていかなければいけないので、ぜひ皆さん方にはそれぞれの地域とかそれぞれのお立場で、できることはぜひしっかり取り組んでいただいて、ぜひ長野県を、皆さんと一緒に元気にしていきたいと思っていますのでご協力をいただきたいなというふうに思っています。

今日は、この会に参加をいただきましたこと、改めて感謝を申し上げるとともに、今日は本当にいい形で高校生がたくさん参加をしてくれたので、期せずして多世代交流の場になったんじゃないかというふうに思います。ぜひ、これからも長野県はこういう形で多くの皆さんが横につながってもらって、そして我々行政も責任を持ってやることはやり、そして地域の皆さんも主体的に取り組んでいただくことは取り組んでいただきながら、一緒になって発展する県づくりを目指していきたいと思っていますので、引き続きのご協力とご参加いただきますように心からお願いいたします。

どうも今日はありがとうございました。

(以上)